

2号自動式卓上電話機

1927



1927年(昭和2年)

関東大震災以後の復旧を機会に、これまで限界にあった手動交換方式を自動交換方式の導入によって解決することになった。

大正15年1月、初めて東京にA形、横浜にH形の自動交換局が設けられた。

最初の自動式電話機は、それぞれの交換機に付随したものであり、その後の増加分は2号共電式電話機に1号ダイヤルを組み合わせたものであったが、ダイヤルすると受話器に雑音が入る欠点があった。

昭和2年、これを改良した2号ダイヤルを取り付けたA形・H形共用の2号自動式電話機が採用された。

特徴

自動式電話は電圧が48V(H形は60V)と高く、当時、電話機の選定には、かなりの論議を呼んだが、電話機製造の経済化、機種の一統化等の面のできるだけ2号共電式と共通のものを用いることとした。したがって、形態は2号共電式にダイヤルをつけた形となっている。

*同系機種

2号自動式壁掛電話機

3号自動式卓上電話機

1933



1933年(昭和8年)

昭和8年、送・受話器を連結した斬新なスタイルの3号電話機が誕生、以降いろいろな電話機のスタイルの原形となった。

以来、わが国の代表的な標準電話機として約30年にわたって活躍した。

戦後、電話の復旧に標準電話機の生産が間に合わず、応急処置として、メーカーの私設交換機用在庫の中から標準機と同等の性能のものを購入して使用した。これらに“富士形”“イ-661”等があった。

特徴

きょう体にベークライトが初めて使用され、送話器には、炭素粉を使ったソリッドバック形を用い、炭素粉の凝固、低感度を解決するため、防じん・防湿措置のほか、側音防止回路を初めて採用した。

*同系機種

3号自動式壁掛電話機
3号自動式富士形電話機
3号共電式卓上・壁掛電話機
3号磁石式卓上・壁掛電話機

4号自動式卓上電話機

1950



1950年(昭和25年)

戦後、従来の3号電話機の性能をさらに上回る新形電話機の研究開発が進められ、昭和25年、性能、デザインともに世界の水準をしのぐ電話機として、4号自動式電話機が誕生した。

“ハイ・ファイ電話機”といわれるほど感度が高く、そのためケーブルの細芯化にも大きな効果をあげた。

同年、東京・丸の内局等6局で商用試験が行われ27年から本格的な4号化が進められた。

特徴

送・受話器内の振動板を従来の軟鉄振動板から軽量なジュラルミン製を用いて共振周波数を高くし感度をあげている。ケーブルは、従来の最小線径0.5ミリ(1,800対)を0.4ミリ(2,400対)に細芯化することができ、ケーブルの経済化・多対化が可能となった。

*同系機種

4号自動式壁掛電話機
4号共電式卓上・壁掛電話機

23号自動式壁掛電話機

1953



1953年(昭和28年)

昭和25年頃は自動改式当初の2号自動式壁掛電話機が旧形のまま20万台弱使われていた。

しかし、この電話機は、伝送特性が悪く、また、部品材料も旧形のままであったため、昭和28年7月、3号自動式電話機と同一の伝送特性及び品質に改善し、23号自動式電話機として使われた。昭和34年頃から順次淘汰された。

特徴

改善部品は、送話器、誘導線輪、端子板及び回路等である。

*同系機種

23号共電式壁掛電話機

電話料金

	1947年	1948年	1951年	1953年	1962年
市内通話	東京月額基本料 住宅用 75円 事務用 120円 度数料 50銭 (市内通話1度毎)	東京月額基本料 住宅用 300円 事務用 480円 度数料 2円 (市内通話1度毎)	東京月額基本料 住宅用 380円 事務用 540円 度数料 5円 (市内通話1度毎)	東京月額基本料 住宅用 700円 事務用 1,000円 度数料 7円 (市内通話1度毎)	市外通話料に距離別時間差法導入 東京月額基本料 住宅用 700円 事務用 1,000円
市外	東京～大阪間 3分毎に38円	東京～大阪間 3分毎に152円	市外通話は即時扱いと 待時扱いを料金区別		東京～大阪間 4秒7円